付載

# 大乗山蓮華寺の歴史

久保尚文

## 1　由緒書の検討

婦中町蓮花寺地内で発掘された建築遺構は、現在富山市梅沢町3丁目15番地にある、臨済宗国泰寺派寺院大乗山蓮華寺の旧境内地の一部であろうと思われる。よって以下に同寺の蓮花寺地内所在期の歴史、および周辺地域の様相について考察する。

大乗山蓮華寺は昭和20年の富山空襲に被災し、「安政二年過去留帳」を除いて、所蔵文書、什物類のほとんどを焼失してしまった。ただし東京大学史料編纂所に後掲の二点の文書が影写されていたのが幸いであった。この蓮華寺は「過去留帳」にみえる歴代住持忌日一覧によれば、元和5年(1619)3月21日没の雲谷禅竜までは加賀伝燈寺より迎えられているが、以後国泰寺末に変わったようである。伝燈寺・国泰寺はともに法燈派の法脈に属する臨済禅院であるが、伝燈寺と同じく恭翁運良によって開かれた放生津興化寺が室町期に十刹位に加えられるなど、伝燈寺系が五山叢林に近かったのに対し、国泰寺は比較的世に顕われぬ林下型の寺院であり、その発展は近世近くになってからである。蓮華寺の法脈が近世初頭に変化したのはそうした禅宗寺院勢力の趨勢を反映したものであろう。それはともかく、残された「過去留帳」には次の由緒記事がみられる。

当寺開基元亨年中名越近江守時有公大檀那、高岡大門ト云所ニ七堂伽藍建立、庄園六十町奉納、開山金沢城中伝燈寺瑞応山ト云、開山ノ弟子仏心円成禅師ヲ時有公拝請ニテ、当寺開山ダリ、次ニ新川郡上飯野ニテ七堂建立、越中守神保氏開基百五十五石奉納、次ニ婦負郡長沢村ニテ七堂伽藍建立、神保長住公開基百七十五石奉納、次ニ富山城へ移り、古寺町ニテ大本堂建立、寺中五ケ寺、久安寺、無門寺、雲柄軒、周恩軒、祈禱軒、右七堂伽藍時ヨリ有来者也、佐々成政公帰依菩提所ナリ、次ニ金府高徳院様ヨリ地面壹万歩拝領也、次ニ当寺町へ引移り多年ナリ、次ニ利次公様御時代九百歩地子拝領、二両ノ内二朱ギンノ事、銀目百十二匁ニ相成り、（下略）

この記事によれば、大乗山蓮華寺は、鎌倉時代最後の越中守護であった名越時有を大檀那として、元亨年中(1321～1323)に現在の高岡市蓮花寺地内に創建されたことになる。開山は放生津興化寺、加賀伝燈寺等を開いた恭翁運良の弟子である仏心円成禅師呑象運光である。やがて神保氏の外護を得て富山市上飯野に七堂伽藍を建立し、ついで婦中町長沢の蓮花寺地内に転じたことになる。

しかしながらこの由緒記事はどれほどの信憑性をもっているのであろうか。「過去留帳」には大乗山蓮華寺の歴代住持等忌日が書上げられているが、呑象運光の忌日については、「観応二年辛卯十月七日、当寺開山瑞応勅諡仏心円成禅師呑象運光大和尚」と記されている。これによれば大乗山蓮華寺の創建は観応2年(1351)以前であることは確かである。一般的にみて禅宗寺院においては法脈はかなり厳重に遵守されているから、前住たちの忌日に大きな誤まりはないとみてよいだろう。したがって恭翁運良―呑象運光以下の師檀関係はほぼ信じてよいと思われる。蓮華寺の創立時期と開山者名は一応信用しておきたい。そうだとすれば開基に関わる大檀那を名越時有とする

のもあながち誤りではないのかもしれない。疑えば疑えるが、否定する心要もないであろう。

だが「過去留帳」のいう、大門→上飯野→長沢移転説の方は全く信用できない。まず高岡大門創建説は、「貞亨二(1685)年寺社由緒書上[註1]」によれば、井口村（高岡市）に真言宗等覚山蓮華寺があり、同地に現存している[註2]ことからみて、否定される。また次に移ったという上飯野の場合も、飯野郷十七ケ村中にある蓮華寺村の名に因んで、大乗山蓮華寺の旧寺地としたのであろう。ことに神保氏の神通川以東への進出は、天文10年代を待たねばならない[註3]。それを待って大乗山蓮華寺が上飯野に移ったとは如何にも考えがたい。さらに大乗山蓮華寺を婦中町長沢地内に招いたのが神保長住であったというのも、それでは蓮華寺の長沢所在期間が数年を越えないことになって、余りにも不自然であり、採用できない。

蓮華寺文書（東京大学史料編纂所架蔵影写本）には次の二点の文書がある。

（A）　制札　長沢蓮華寺

一、濫妨狼藉山林竹木不可伐取之事

一、寺内江軍兵推入不可有陣取之事

付同寺内并寺領麓促使不可有之、

以断可相済事

一、寺領等任先規之旨、一切不可有諸役之事

付定役之事、荒不作又錯乱之時者

不可有其役事

一、如前々棟別段別徳銭徳米平夫不可相懸之事

一、塔頭寮舎断絶付而者、従常住可為策配之事

天正九年十月九日　　長住（花押）

（B）　禁制　　蓮花寺

一、濫妨狼藉事

一、放火之事

一、不謂儀申懸事

右条々堅令停止訖、若於違犯輩者

速可処厳科者也

天正拾年　　佐々内蔵助

六月廿五日　　成政(花押)

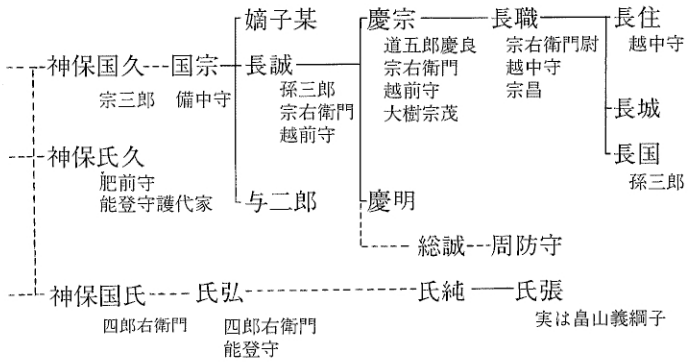
この(A)・(B)文書の存在からすれば、蓮華寺は、神保長住時代以前から長沢の地にあったとみた方がよいのではなかろうか。また「過去留帳」では佐々成政が蓮華寺を長沢から富山城下に移したように記しているが、(A)・(B)文書の時間的近さ、また状況からみて、とても成政がこの間に蓮華寺を富山城下に移転させたとは考えられない。成政は天正13(1585)年に豊臣秀吉軍に降伏した後、大坂城に生活することになったから、その富山在城は三年余にすぎない。すなわち佐々成政が富山城に入ったのは、天正10(1582)年３月に神保長住が小嶋職鎮・唐人式部らの率いる一揆勢によって富山城に幽閉された結果、その責を問われて越中を退去して以後のことなのである。しかもこの年６月２日には本能寺の変があって織田信長が討たれ、その将としての佐々成政はその支配地域の確保に懸命であった。(B)禁制はそのために長沢蓮華寺に出されたものなのである。このように蓮華寺を長沢から富山に移したのは佐々成政ではなく、次の前田氏であったと考えるべきである。

以上のように、蓮華寺が高岡大門→富山上飯野→婦中長沢と転々としていたとする「過去留帳」の説は全く信じがたい。私はその創設以来富山城下に移るまで、蓮華寺は久しく長沢地内にあったと考える。文献史料ではそれを証明することはできないが、発掘調査の成果はまさにそれを

明かにしてくれるものと思う。

大乗山蓮華寺は鎌倉末あるいは南北朝初頭に呑象運光を開山として創建され、中世を通じて長沢の地にあった。成立間もない観応年間(1350～1351)以後、応安年間(1368～1374)にかけては、足利直義方の桃井直常と、足利尊氏方の斯波義将との越中守護職をかけた激戦が越中各地で闘われた。ことに応安3年(1370)には越中守護斯波義将が、桃井直常の子（あるいは孫）の直和を長沢において破っている。そうしたことを考慮すれば、蓮華寺もたえず戦火の危険にさらされていたと思われ、必ずしも無事ではなかったと思われる。15世紀以後の長沢の地は、婦負・射水両郡守護代神保氏の一族あるいは被官の有力拠点になって、蓮華寺もその外護をうけて安定した寺院経営が営まれたと推測される。しかし、神保氏が永禄年間に越後上杉謙信の攻撃によって衰退し、やがて滅亡したために、蓮華寺の存在基盤も不安定化し、中世における発展の諸相を伝える諸記録等をも失ったのであろう。

## 2　神保氏と長沢地域




これは越中守護畠山氏のもとで、婦負・射水両郡の守護代職を務めた神保氏の推定系図である。[註4] このうち神保慶宗までは放生津を拠点として繁栄していた。しかし永正3年(1506)一向一揆との抗争を契機として、慶宗は守護畠山尚順・能登守護畠山義総や越後守護代長尾為景との関係を悪化させ永正17年(1520)12月にはついに長尾軍に敗北し、滅亡した。そのため放生津も壊滅的打撃を蒙ったと思われる。やがて登場する神保長職はほとんど放生津との関係を示さない。この長職は宗右衛門尉の称を継いでいることからみて、放生津神保氏の正嫡と思われる。石清水八幡宮菊大路家文書によれば、慶宗には某年「小法師出産」したという。あるいはこれが長職にあたるのかもしれない。

長職の活動は射水郡域よりもむしろ婦負郡域において顕著であるようである。長職の史料的初見は天文14年(1545)の玉永寺（富山市西水橋）文書だが、それは神保氏が天文12年頃に神通川を越えて東進し、富山城を築いて現在の富山市街地域一帯を拠点として、新川郡椎名氏の勢力を常願寺川以西から排除したことを示す文書である。長職はかって放生津にあった所縁の時宗寺院報土寺などを富山城下に再興している。長職が放生津ではなく富山を拠点としたのは何故だろうか。私は一連の動向からみて、長職が天文初年までの雌伏時代をすごしたのは、富山に程近い婦負郡長沢辺であったと思う。この地には鎌倉末―南北朝期に、蓮華寺の他に、律宗寺院弘正院があったこ

とが知られる（大和西大寺諸国末寺帖）。西大寺叡尊の流れを汲む律宗寺院は北条氏など鎌倉幕府の有力諸家の尊崇が篤かったことが知られる。そうした寺院が長沢の地にあったこと自体この地が早くから越中における一つの支配拠点であったことをうかがわせる。桃井直常党が南北朝期にこの地で闘ったというのも、桃井氏もこの地に拠っていたことを示すものであろう。それはさらに室町期以後、神保氏が婦負郡域支配の拠点として、この地に勢力を扶植したことを推察せしめる。

ところで、この長沢とは山田川をはさんで対岸に位置する富崎城には、『三州志』によれば、嘉吉元(1441)年に神保八郎左衛門が居城し、神保長職の在城時代に上杉謙信に敗れて蓮華寺村の深沼で戦死したという。この神保八郎右衛門家は元来神保氏の庶家であったと思われるが、明応2(1493)年の河内正覚寺合戦にも畠山政長に従って出陣し、誉田城において切腹している神保八郎（『蔭涼軒日録』）もその歴代の一人であろう。こうした庶家神保氏を中心としつつ、長沢・富崎周辺地域において実質的勢力を養い、神保氏の婦負郡における守護代支配権を行使していたのは、神保氏の有力被官であった小嶋氏や寺嶋氏であろう。今日両氏の所在を明示する史料はほとんどないが、近世の城館遺構書上類によれば、両氏は富崎・高山・大道城等の地域にその伝承を色濃く伝えている。こうした小嶋・寺嶋両氏に支えられることによって、神保長職は長沢辺に雌伏し、勢力を涵養し、天文12(1543)年頃にはついに神通川を越えて富山地域に入り、神保氏の再興を天下に告げるとともに、椎名氏との対決に踏み切ったのである。

神保長職の勢力は天文末年までかなり大きかったと思われる。しかし対立する椎名氏を支援する越後の長尾景虎（上杉謙信）の威勢が大きくなるとともに、椎名方の捲きかえしが始まった。永禄3(1560)年、前年来の神保・椎名両軍の抗争激化にともない、椎名康胤の援軍派遣要請をうけて越中に入った謙信は、直ちに富山城を攻略し、ために神保長職は増山城を経て逃走した。だが謙信の帰国とともに長職は早速再挙し、永禄5(1562)年には二度にわたって入国した謙信を、呉羽山に拠って迎え討った。しかし長職方は撃破され、長職は能登の畠山義綱に仲介を頼んで謙信に降伏した。以後の神保長職は畠山氏の保護下に増山城に逼塞したようである。しかし永禄9(1566)年、能登守護家の内紛が激化し、畠山義綱が重臣層によって追放されると、神保長職は後援者の危機を援助すべく、義綱の帰国作戦に尽力した。そのため同じく義綱支援の立場を打ち出した上杉謙信との関係は次第に深められていった。しかしそれは上杉氏の威勢を背景として越中での勢力拡大を目論できた椎名康胤の利害と対立するものであった。それゆえ、神保長職らが永禄11年に義綱帰国作戦を具体化しようとした時、椎名氏は一挙に反上杉方に転じ、武田信玄・本願寺・一向一揆方と結んだのである。

こうした椎名氏の動静は当然神保方にも影響を及ぼす。神保方はこの時点では必ずしも親上杉方の立場を明確にしていたわけではない。明確であったのは畠山義綱擁立の立場だけであった。このため永禄11(1568)年秋になると、神保家中は椎名方や一向一揆方からの誘いをうけて動揺し、内訌するところとなった。神保長職と小嶋職鎮らは上杉方へ、寺嶋職定らはこれに離反して椎名方と結ぶことになったようである。こうして神保家臣団は分裂したが、それは謙信に敗れて以後の神

保長職の家臣団統制力が弱体化していたことも示す。そして神保方における実権は小嶋職鎮が握る。元亀3年(1572)頃には長職は没したであろう。なお分裂した神保家臣団のうち、小嶋職鎮方は増山・日宮・富崎城等に拠り、寺嶋職定方は新川郡池田城に拠っている。そして寺嶋方の旧領等は、槻尾氏の旧領が神保覚広に宛てられるなど、小嶋方によって処分されている。

さて、私は神保家臣団から離脱した寺嶋職定方は、おそらく長職の嫡子であった長住を擁していたと考えている。神保長住は後年京都に出て浪々していたところを、織田信長に召し出され、上杉謙信が没するとともに、天正6年(1578)に佐々長穐が副えられ、斎藤新吾の加勢をえて、越中に再入国する。その経歴は元亀—天正初年頃の謙信の越中席捲期には長住が謙信と相容れない立場であったことを示している。それは小嶋職鎮との対立に置き換えることができるであろう。

越中への再入国を達成した神保長住は富山城に入った。越中の政治・軍事情勢がこのように上杉方と織田方との対立状況下に置かれることになった結果、かっての神保家臣団は神保長住のもとに再編成される。しかし畿内情勢の緊迫化にともなって、織田方の長住に対する支援が途絶え、また春日山御館の乱を収拾した上杉景勝—河田長親方の越中進出が強化されてくると、神保家臣団は再度上杉方になびきはじめる。天正9年(1581)には佐々成政が守山城に入り、織田方勢は強化されたのであるが、天正10年(1582)3月には神保覚広・小嶋職鎮・唐人親広らがひそかに上杉方に通じ、一揆を蜂起させて富山城を奪い、神保長住を城内に押し籠めた。織田方はこの時魚津城を攻めており、小嶋らの意図は織田方の背後を衝くことにあったが、柴田勝家らの織田方は、これを待っていたかのように小嶋方を包囲制圧した。この事件後長住は失脚し、代わって成政が富山城に入る。長住は天正11年(1583)8月、越中還住の祈念を伊勢神宮御師に依頼するが、勿論帰国できない。

以上のように神保長職以後、神保氏は長沢地域と深く関わっている。長職が富山方面に進出できたのも、この地域の神保家臣団の強力な支援があったからこそであろう。しかし永禄11年以後その神保家臣団が分裂したために、神保氏そのものが衰退し、さらに上杉・織田抗争の間で翻弄され、小嶋氏らが上杉方に組して、織田方から追われる結果となり、以後長沢地域との関係も絶えることになった。やがて蓮華寺が富山城下に移されるなど、神保氏とともに発展した長沢地域は急速に衰退し、また神保氏以前についての伝承も失われていったと思われる。

## 3　盤谷和尚筆神保長住墓碑銘

長沢の蓮花寺内には神保長住の墓と称せられる石塔があり、その四面に次の銘文がみられる。

(向右側面)　　寄附　江尻一族

(正　　面)　天正十年正月廿一日　大樹宗茂大禅定門

(裏　　面)　　神保安芸守長住墓

(向左側面)　富山蓮華寺三十世　現住　盤谷建之

大乗山蓮華寺の「過去留帳」によれば、盤谷和尚は文化9年(1811)4月21日寂。したがって上記石塔

は神保氏滅亡後 200年余を経て建てられたものであり、神保長住の墓ではなく供養塔である。したがって供養塔であるにしても銘文の史料的信憑性は大いに疑わしい。

前節に見たように、長住は天正10年(1582)に越中を追われ、翌年には越中への帰国を祈願している。したがって天正10年正月には当然生存している。また長住がその後帰国できたとも考えられない。長住が長沢において没したとは考えられない。また長住の官途名は「越中守」であって、「安芸守」ではない。「安芸守」とは神保氏張のそれである。両人の事蹟が全く混同されている。さらに「大樹宗茂大禅定門」というのは、決して長住の戒名ではない。おそらく長住の祖父にあたるであろう神保慶宗（～永正17年(1520)12月21日没）のものである。

婦負・射水両郡守護代家神保氏の菩提寺は、現在富山市五番町にある曹洞宗春日山光厳寺であった。その三世東海宗洋和尚は自身神保氏の出身であり、神保慶宗時代の人であり、その語録である『光厳東海和尚録』（原本は昭和20年富山空襲の際焼失）に神保氏関係記事が頻出する。その一節に「前大徳一休老人、為惟宗朝臣右金吾尉慶宗、安戒名、曰宗茂也、需雅号於余、々弗護拒、以大樹二字命之」とある。上記の石塔で神保長住の戒名とされているものが、この慶宗の戒名に完全に一致するのである。「光厳寺過去帳」（同じく焼失）にもこの戒名があり、慶宗の忌日には供養が続けられてきたようである。[註5]

神保氏の事蹟はこのように混乱し、誤解を生じている。こうした混乱と誤解は近世に著わされた富山地域に関する史書『肯搆泉達録』のそれと相通ずるものである。そうした史書が書かれるためには、おそらく蓮華寺等の伝承史料が採録されたのではないかと考えられる。あるいは全く逆の場合もあり得ようが、ともあれ、その混乱・誤解は同根であろう。大乗山蓮華寺「過去留帳」には、「天正元年(1573)癸酉八月廿日松雲院殿前左金吾大球宗光大居士　神保越中守殿父」「天正六年五月十八日報恩寺殿柏堂宗慶大姉　神保越中守殿母」「天正六年寅ノ天三月六日芳春院殿巻顔宗留大禅定尼　神保越中守殿室」「天正八辰年二月廿一日大樹宗茂大禅定門　神保越中守殿」といった、神保長住に事寄せた忌日記事が記されている。蓮華寺が神保長住との関係を強く意識していたのは明らかだが、真実その菩提寺的性格を帯びていたかどうかは明らかではない。おそらく先に紹介した神保長住制札の由来を説明するべく、近世になってから伝承にもとずいて記載されたものであろう。しかし、蓮華寺の中世における歴史は、先に見てきたように、庶家筋ではあるにしても神保氏と関わりつつ展開されてきたことは疑えないようである。

なお、大乗山蓮華寺の「過去留帳」には、蓮華寺の由緒、神保氏との関わりが、六治公伝説と関係づけられて記されている。ここでは検討するまでに至らなかったことをお断わりしておく。

註1　『加越能寺社由来』上巻（石川県図書館協会、1974）
註2　真言宗等覚山蓮華寺の由緒については『富山の寺社』（巧玄出版富山文庫9、1978）参照
註3　久保尚文　「富山城の形成と神保氏」（『越中中世史の研究』柏書房1983）参照
註4　久保尚文　「越中神保氏の諸問題(I)」（同上）参照
註5　金森久一　「戦国期における越中光厳寺」上・下（『高志人』7巻3・4号 1942）